

異世界 子育てしながら冒険者します

ゆるり紀行

14

Minazuki Shizuru
水無月静琉

ボルト

タクミの契約獣となった
サンダーホーク。

ベクトル

タクミの契約獣となった
スカーレットキングレオ。
小型にもなれる。

エレナ

水神の子で、タクミに
保護された少女。
格闘術が得意。

マイル

タクミの契約獣となった
フォレストラット。

アレン

水神の子で、妹・エレナと
ともにタクミに保護された
少年。格闘術が得意。

タクミ・カヤノ

異世界に風神の眷属として
転生した本作の主人公。
アレンとエレナの保護者。

カイザー

タクミと仮の従魔契約を
結んだリヴァイアサン。
人化のスキルを使える。

フイト

タクミの契約獣となった
飛天虎。小型にもなれる。

ジュール

タクミの契約獣となった
フェンリル。小型にもなれる。

登場
CHARACTER
人物

第一章 パステルラビットを探しに行こう。

僕は茅野巧^{かやのたくみ}。元日本人。

何故「元」かというと、エーテルディアの神様の一人、風神シルフィール——シルが起こしたうっかり事故で一度死んでしまったからだ。そして、そのことに責任を感じたシルが、僕を自分の眷属^{けんぞく}としてエーテルディアに転生させてくれた。

しかし、転生した僕が最初にいた場所は、危険な魔物がうじゃうじゃという場所だった。しかも、その森で双子の子供と遭遇^{そうごう}したのだ。

危険な場所に子供を放置するわけにはいかず、保護したのだが……後日、その子供が水神様の子供だと判明。さすがに神様の子供を放っておくわけにはいかなかったのだ、アレンとエレナと名づけ、正式に自分の弟妹^{きょうまい}として育てることにした。

僕は子育て未経験だったが、子供達がとても良い子で手がからなかったのと、知り合った人達に助けられたことではなくなっている。

つい先日、僕達が大変お世話になっているルーウェン伯爵家^{はくしきけ}の次男、グランヴァルト・ルーウェ

ン——ヴァルトさんとロザリー・グラキエス——今はもうロザリー・ルーウエンだが、ロザリーさんとの結婚けっこん式が行われた。

その結婚式は、シルが少々問題を起こしたり、披露宴ひろうえんでは思ってもみなかった展開になったりして、すんなりとはいかなかったが……まあ、無事に終わった。

結婚式の翌日には、ロザリーさんに僕の契約獣であるフェンリルのジュール、飛天虎ひてんこのフィート、サンダーホークのボルト、スカーレットキングレオのベクトル、フォレストラットのマイル、パステルラビット達も紹介した。それとルーウエン家の皆さんにも、ジュール達の実は成獣であったことを明かしただけ……—

みんなは驚きつつも普通に受け入れてくれたので、僕はひと安心したのだった。

「さがすぞー！」

《《《《《おー！》》》》》

披露宴の数日後、僕と子供達は、ジュール達と共にロザリーさんにプレゼントするパステルラビットを捕獲するために森にやって来た。ジュール達を紹介した時、ロザリーさんが動物好きっていうことが判明したからな。

僕達が年明けまで王都にしていると知っていたヴァルトさんは、暖かくなつてから探しに行けばいいと言ってくれたが、張り切った子供達がそれでは嫌いやだと言うのだ。なので、僕は早々にお出か

けだ。

まあそもそも、外に遊びに行ったり依頼を受けたりするのを、子供達が年明けまで我慢がまんできるとは思えないしな。

「さて、どっちに行く？」

「あっちー！」

行く方向は、いつものようにアレンとエレナが行きたいほうだ。

「そういえば、パステルラビットは青色を探すのか？」

「ぎんいろと」

「あかがいい」

「銀と赤？」

「ヴァルトにいと」

「ロザリーねえさま」

「ああ、二人の髪の色か」

「そっ—」

銀色と赤のパステルラビットか。確かにその色が揃そろっていたら、二人のためのパステルラビットって感じがするが……銀色のパステルラビットっているのかな？

「あ、あおもさがすよー」

「ん？　じゃあ、ヴァルトさんとロザリーさんには三匹のパステルラビットを連れて帰るのか？」
「そうー！」

まあ、パステルラビットの飼育はそんなに手間は掛からないし、餌代もそれほど必要としないので、三匹くらい問題ないか。

「見つかるといいね」

「みつけるのー！」

「……ははっ、そうだね」

子供達のやる気が本当に凄い。僕のほうが思わずたじたじになってしまう。

《ねえ、ねえ、今日は薬草の採取はするの？》

「するよ」

ジュールの質問に、子供達は元氣よく頷く。

依頼を受けて来ているわけではないが、子供達は薬草採取も目論んでいるようだ。

《あらあら、二人とも働き者ねえ》

返答する子供達を、フィートが微笑ましそうに見つめていた。

《兄ちゃん、兄ちゃん、あれ、あるかな？　雪に埋まってるキノコ。オレ、あれ探したい！》

「ああ、ユキシタ茸か。あれは雪が深いところじゃないと見つからないから、ここの辺にはないんじゃないかな？」

ベクトルがユキシタ茸を探したが、ここの辺の雪はうっすらと積もっているだけなので、もつと山のほうに行かないと見つからないだろう。

《ええ。アレン、エレナ、もつと山のほうに行こうよ。ほら、前にいっぱいパステルラビットがいた洞窟とかに行けば、パステルラビットもいっぱい見つかるしさ》

ユキシタ茸は美味しいからか、ベクトルは採りに行きたくて仕方がないようだ。

「ん？」

しかし、アレンとエレナはあまり興味がなさそうである。

《あんまり売りたいくないけど、いっぱい採れば依頼とかで使えるんじゃないの？　兄ちゃん、珍しいキノコだって言っていたし！》

「うっちゃん？」

《いっぱい採って、ちよつとだけね》

食べものを売るのを嫌がるベクトルが、売ることを提案するなんてなかなかない光景だ。

それを提案するほど、ユキシタ茸を採りに行きたいのか。

《ねえ、兄ちゃん、あのキノコ売れるよね？》

「まあ、売れるだろうし、依頼も間違いなくあるだろうな」

確か、ユキシタ茸の依頼は毎年出ているはずだが、あまり達成できる人はいないらしい。見つげづらいキノコだからな。

依頼を受けたら、間違いなくギルドには喜ばれるだろうな。

「ん」

《ほら、アレンとエレナはギルドのランクを上げたいって言ってたじゃん》

ベクトルが一生懸命にアレンとエレナを説得しようとしている。本当に珍しい光景だ。

《ねえ、アレン、エレナ、お願い》

「うん」

《ほらほら、ヴァルト様のお嫁さんへのお土産にしようよ！》

「おお！」

ベクトルがロザリーさんのことを持ち出すと、渋っていたアレンとエレナが違う反応を示す。

《きつと喜んでくれるよ！》

「とりにつこうー！」

《やった》

子供達はどうとう意見を翻し、ベクトルの希望が通ることになった。

というわけで、僕達は雪が多く積もる山頂のほうへ向かうことにした。

「もうちよつとっ」

「そうだな、もう少し深いほうがいいと思う」

山を登るとだんだんと雪が深くなってきた。さすがに子供達は歩くのが大変になってきて、大き

くなったフィートの背に乘せる。

「ゆき、いっぱいだね」

「そうだな。どうだろう、ここら辺ならもうユキシタ茸もありそうだな」

そして、積雪量が僕の膝下くらいの深さのところで、登るのを止める。

《探してみる！》

すぐにベクトルが辺りの匂いを嗅ぎ、ユキシタ茸を探し始める。

《ここだー！》

すると、すぐに何かを見つけたようだ。

ベクトルは頭から雪に突っ込み、雪をずぼずぼと掘っていく。

《あつたー！》

無事に一個目のユキシタ茸を発見したようだ。

「お、まあまあ大きさだな」

ベクトルが見つけたのは、直径が十センチほどのものだった。

ユキシタ茸は上に積もる雪が多ければ多いほど、大きくて美味しいものになる。この大きさだと……中の下くらいかな？

それを見て、ジュールが首を傾げる。

《去年採ったものよりちよつと小さめかな？》

「まあ……そうだね。でも、これでも美味しいだろうな」

去年採ったユキシタ茸の大きさは、平均で十四、五センチ。一番大きくて十七、八センチはあったと思う。それに比べれば確かに小さめだ。だがまあ、この大きさでも美味しいんだけどな。

《むう……兄ちゃん！ もっと上に行こう！》

ジュールもベクトルを煽^{おほ}るつもりはなかっただろうが、ベクトルは去年より小さいという言葉がお気に召さなかったようだ。

「こら辺のもので十分の良いものだよ」

《ヤダ！ もっと大きいを見つけない！》

「……」

ベクトルは完全にやる気になってしまったようだ。

「僕もこれ以上登るのは大変なんだよ」

《じゃあ、兄ちゃん達はこら辺にいて！ オレ、行ってくる！》

「……」

実際はまだ登ろうと思えば登ることはできるだろうが、戻るのが大変になってしまう。なので、それとなく伝えてみたのだが、ベクトルはそれでも止まる気配がなかった。

「あゝ、そうだな……ボルト、マイル、ベクトルと一緒にしてくれるか？」

《はい、任せてください！》

《わかったの！ ベクトルの面倒を見るの！》

ベクトルは普段から、わりと単独で自由にさせていることが多いが、何となく今日は危ない気がしたので、お目付け役にボルトとマイルを付けることにした。ボルトもマイルも僕の気持ちを汲^くみ取ってか、快く引き受けてくれる。

「ベクトル、ボルトとマイルから離れちゃ駄^だ目だよ」

《わかった！ ——マイル、早く乗って！》

《もう、ベクトル、ちよつと落ち着くの！》

僕が許可を出すと、ベクトルはマイルを急^せかすように背に寄せ、山頂に向かつてずぼずぼと雪を掻^かき分けながら駆^かけて行ってしまった。

《じゃあ、兄上、ぼくも行ってきます》

「あ、待つて。これこれ！」

ボルトが慌てて二匹を追いかけてよとするので、僕は急いでボルトにマジックバッグを渡す。

《あ、そうですね。預かります》

「気をつけてな」

《はい》

ボルトはマジックバッグを受け取ると、もう姿が見えなくなったベクトル達を追いかけて飛んでいく。

《大丈夫かな？》

《山の雪を全部溶かすようなことをしないといいのだけど……》

「……え？」

三匹の姿が見えなくなったところで、ジュールとフィートが呟いた言葉に僕は戦慄した。

「ボルト、マイル、頼むな」

絶対にないとは言切れないことなので、僕はボルトとマイルに向かって祈るように願っておい

た。災害を起こさずに無事に帰って来てくれ、とね！

《お兄ちゃん、言い出したボクが言うのも何だけど、きつと大丈夫だよ》

《そうね。ボルトとマイルがしっかり見張ってくれているものね》

「そ、そうだよな」

ジュールとフィートの言葉に、何とか気持ちを落ち着かせる。

《それで、お兄ちゃん、ボク達はこころでユキシタ茸の採取をする？》

僕が落ち着いたところを見計らって、ジュールがこの後どうするか尋ねてきた。

「いや、ユキシタ茸はベクトル達に任せて、僕達はパステルラビットを探そうか。もともとの目的はそれだしね」

《それもそうね。きつとベクトルがいつぱい探ってきてくれるものね》

というわけで、僕達は当初の予定通りパステルラビットを探すことにしたのだが――

「あつ！ いた！」

「いた？ パステルラビットか？」

「そうー」

すぐにアレンとエレナがパステルラビットを見つけたようで、茂みの中に潜っていく。

《さて、何色のパステルラビットがいるかな？》

《アレンちゃんとエレナちゃんなら、赤と青は確実にいるんじゃないかしら？》

「そうだな。それに一、二匹じゃなくて、いつぱい連れてきそうだよな」

僕はジュールとフィートと一緒に、子供達が連れ帰ってくるパステルラビットの色と数を予想する。

「おにいちゃん、いつぱいいたよ」

案の定、アレンとエレナは複数のパステルラビットを抱いて戻ってきた。

「六匹か」

《えっと、アレンが抱いているのは、赤、緑、ピンクだね》

《エレナちゃんのほうは、青、紫、黄色ね》

「さすがだな。見つけたい三色のうち二色がいたか」

銀のパステルラビットはそもそも存在しているかどうかがわからないので、ほぼほぼ目的は達成できたと言える。

「これで充分だと言いたいが……」

「だめー!」

「ぎんいろのこも」

「さがすの!」

「だよな」

アレンとエレナがこれで満足するとは思えないので、パステルラビット探しは続行だな。

ただ、決めておかないといけないこともある。

「銀のパステルラビットが見つけれなくても一泊まで。明日には街に戻るからな。いい?」

「わかったー」

とりあえず、期限だけはしっかりと決める。じゃないと、ずるずると何日も探すことになりそうだからな。

「それじゃあ、その子達はまた籠に入れておくか」

「うん!」

僕が《無限収納》から大きめな籠を取り出すと、アレンとエレナは手慣れたようにパステルラビットを入れていく。

「いつも思うし、いつも言っているが……本当に逃げないよな」

《うん、ボクもいつも不思議に思う》

《何を基準に危険と判断しているか、聞いてみたいわよね》

そもそもパステルラビットはとても臆病で警戒心が強く、なかなか見つからないし、見つけてもすぐに逃げてしまうのだ。

しかし、アレンとエレナが見つけてくる個体はまったく違っていて、今もジュールとフィートが籠に顔を近づけるが、パステルラビット達はのんびりとしている。

二匹とも種族で言えば猛獣の類(もうちゅうたぐい)なんだけどなく。不思議である。

「まあ、考えても原因はわからないし、気にしないで次に行こうか」

《それもそうだね》

《アレンちゃん、エレナちゃん、次はどっちに行くのかしら?》

「あっちー」

深く考えるのは止め、僕達は再び子供達が示す方向へと移動する。

「あっー」

しばらく歩くと、子供達がまた何かを見つけて茂みに潜っていった。

《お? いたかな?》

《銀のパステルラビットがいるといいのだけど、どうかしらね》

「白と灰色ならいるから、それで妥協(たきよう)してくれるといいんだけどなく」

《無理じゃない?》

《無理じゃないかしら？》

「……」

ジュールとフィートが少しの希望もくれない。

思わず黙っている、アレンとエレナが嬉々とした様子で戻ってきた。

「おにいちゃん、みてみて〜」

「何だ？ 銀色のパステルラビットがいたかい？」

「それはいいーい。でもね！」

目的のパステルラビットが見つかったのかと思ったが違ったようだ。

「とりさんも」

「みつけた〜」

「へ？ 鳥？」

「「とり〜」」

「んん？」

喜んでいる理由は鳥らしいが……鳥？

野球ボールくらいかな？ アレンが片手で掴めるくらいの、もふもふで真っ白い丸いものを持っているが……まったく鳥に見えなかった。

『ひい』

「あ、鳴いた」

先ほどまで見ていたのは背中側だったのだろう。白いもふもふがもぞもぞと動くと、黒いつぶらな瞳と小さな嘴が見えた。

「本当に鳥だ。でも、魔物じゃないよな？」

魔力を感じないので、ただの鳥なのだろう。

僕が手のひらを上にして差し出せば、鳥は無警戒でそこに乗ってくる。

それにしても小さい鳥だな〜。以前出会ったバトルイーグルの雛よりも小さい。

「えっと……えっ!? オーロラバード!? 本当に!?」

何の鳥かわからなかったのすぐに【鑑定】で調べてみると、オーロラバードという種類の鳥だということがわかった。

オーロラバードは、月光に当たると白い毛がオーロラのように光ると言われている、非常に珍しく稀少な鳥だ。しかもこの個体は、小さいが雛ではなく、成体のようだ。

「どこにいたの!？」

「パステルラビットと〜」

「いっしょにいた〜」

「はい!? え、だって今回はパステルラビットを連れていなかったよね？」

戻ってきた子供達はパステルラビットを抱えていなかったよな？ あれ？ でも……先ほど子供

達は「とりさん」も」と言っていた気がする！

《お兄ちゃん、お兄ちゃん》

「どうした、ジュール？」

《足元にいっぱいいるよ》

「……え？」

ジュールに指摘を受けて足元を見ると——パステルラビットが寛いでいるではないか！
「うわっ！ 一つの間に!? 何匹いるんだ？」

《兄様、間違っていないければ七匹いるわよ》

七匹……じゃあ、これで合計十三匹だな。

「んにゅ？」

「アレン、エレナ、どうした？」

「にひき、たりない？」

「え、まだいるの？」

「きゅうひき、いたの？」

「ちよつとまってね」

アレンとエレナは慌てて茂みの奥に舞い戻っていった。

パステルラビットは九匹。合計十五匹になるらしい。

「「いたいた」」

すぐに子供達は一匹ずつ、パステルラビットを抱えて戻ってきた。

「えっと……その子達は僕達と一緒に行きたくないんじゃないのか？」

「そんなことないよ」

「ねてるだけ」

「……」

暢気^{のんき}に寝ていたのか。パステルラビット特有の警戒心はどこにいったんだか……。

「じゃあ、連れて行っていないんだな」

「「うん」」

「やさしい」

「かいぬしさん」

「さがすのー」

優しい飼い主に当たるかどうかは、はっきり言って運によるものだけだな。

「それで、このオーロラバードはどうするんだ？」

「ぎん^{ぎん}のこ、いなかったから」

「とりさん、かわりにするね」

「……そうなのか」

どうやら、銀色のパステルラビットを諦め、オーロラバードをヴァルトさんとロザリーさんへのお土産にするつもりようだ。

オーロラバードのほうも捕まえているわけではないのに逃げないところを見ると、連れて行かれて飼われるのでもいいと思っているのだろう。

「よろこんでくれるかなー？」

「そうだな。ロザリーさんは喜んでくれるんじゃないか？」

ヴァルトさんのほうは怒りそうな気がするけどな！

まあ、怒られるかどうかはともかく。目的のものは見つけたということで街に戻ろうかと思ったのだが、子供達が外泊を希望した。なので、まずはベクトル達と合流した。

《兄ちゃん！ いっぱい採ってきたよ！》

ベクトルはユキシタ茸をたっぷり採取してご機嫌そうにしていたが、ボルトとマイルは少々疲れた様子だった。

「ボルト、マイル、大丈夫か？」

《はい、大丈夫です。少し疲れただけです》

《ベクトルが体力おバカなだけなの！》

いろいろと振り回されたようだ。

「二人に任せつきりにしちゃってごめんな」

《謝らないでください！ ぼくは役に立って嬉しいんですから！》

《そうなの！ 謝るんじゃないくて、褒めてほしいの！》

「それもそうだな。ボルトもマイルも頑張ってくれてありがとう」

あ、これは「褒める」「じゃなくて」「お礼」だな。

だがまあ、とりあえずいっぱい撫でておこう。

《なににー？ ボルトとマイルだけじゃなくて、オレも撫でて〜》

ボルトとマイルを労わるように撫でていたら、ベクトルが暢気に混ざってきた。

うちの子達は全員、わりと体力は有り余っているが、ベクトルは無尽蔵むじんぞうって感じだよな。

「まだ早いけど、今日は家を出すところを探して室内でまったりしようか」

というわけで、僕は良さそうな場所を探し、そこで《無限収納》から家を出して室内でゴロゴロすることにした。

この家は、ルイビアの街で職人さんに作ってもらったもので、こうして外で泊まる時に使えるように、《無限収納》に収納してあるものだ。

そして、日が暮れてから晩ご飯の準備に取り掛かる。

「ご飯は何にするー？」

《兄ちゃん、兄ちゃん、せっかくだからユキシタ茸を食べようよ！》

「それもそうだな。みんな、それでいい？」



「『『『『『いー!』』』』』」

ベクトルの提案で、ご飯はユキシタ茸を使った料理にすることは決まったが――

「キノコ料理、キノコ料理……」

キノコ料理がすぐに思いつかなかった。

えっと、前は確か……鍋にしたはずだ。なので、それ以外のものにしたい。

あ！炊き込みご飯に天ぷらなんていいんじゃないか？

何種類かのキノコを混ぜてご飯を炊いて、天ぷらは……ユキシタ茸、エビ、キスはないので何かの白身魚、アマ芋、イシウリ……あ、ナスを見つけたのでそれもいいかも。ちくわも食べたいところだが、ないので諦めよう。

あとはイカもいいな。奮発してクラークンでいこう。種類はこのくらいでいいかな？でも、物足りなかつたら困るので、ササミ肉やバラ肉も天ぷらにしておこう。足りなかつたら食べればいいし。足りたら後日丼ものにしてもいいしな。

で、それにミソ汁とお浸しあたりでいいだろう。

「よし！」

「きまつたー？」

「決まつたよ〜」

「なーに？」

「キノコのご飯と天ぷらだよ」

「りょうほうすきー」

「そうか、それは良かった。でも、天ぷらは前より豪華にするぞ」

「たのしみー」

炊き込みご飯はこれまでも具材を変えていろいろ作ってきた。ただ、天ぷらは一度作っただけで、その時は菜食主義のエルフ、オズワルドさんのところで作ったから、野菜のみだったんだよ。なので、今日は魚介をたっぷり揚げよう。

「アレンとエレナはご飯用のキノコを用意してくれる？」

「はい」

子供達にはご飯用のキノコを適度な大きさに手で割いてもらう。

その間に僕は白麦——元の世界で言うお米に、水と調味料を入れたものを用意しておく。

「キノコはここに入れておいて」

「いっぱい入れていいー？」

「いいけど……ほどほどにしてね」

子供達の「いっぱい」がどの程度かわからないが、「いいよ」と言ったら最後、とんでもない量のキノコを入れそうな気がしたので、躊躇いがちの返事になってしまった。でもまあ、炊飯器から溢れるほど入れることはないだろう。

「ごはん、たいていいー？」

「うん、お願い」

子供達はキノコを入れると、慣れたような手つきで魔道具を操作する。

あ、キノコの量については許容の範囲内だったよ！

「つぎはー？」

「ミソ汁の具を考えてー」

「えつと……」

子供達が悩んでいる間に、お浸しはシンプルにほうれん草——エナ草を削り節とショーユで和えてしまう。

「おにいちゃん、おいもがいいー」

「了解。アマ芋は天ぷらにするから、マロ芋にしようか」

「うんー」

天ぷらの具材を用意しながらミソ汁も作っていく。

「今から揚げものをするから、二人は離れていてな」

「はい」

天ぷらの衣はかなり適当なので、さすがに揚げてしばらく経ってもカラッとサクサクしたまま……という状態を維持できるようなものは作れない。だが、揚げ立てを《無限収納》に入れてお

けば、いつでも熱々サクサクで食べられるのだ！

「できたー？」

「できたよ。食べようか」

「うん！」

ご飯などを盛り付けて、早速食べ始める。

「さくさくだー！」

《本当だ。美味しい！》

《魚介はふりぷりね》

《イシウリとアマ芋はホクホクです》

《ユキシタ茸！ やっぱり美味しい！》

《頑張ったかいがあったの！》

みんな気に入ったようだ。

とはいっても、うちの子達が気に入らなかったご飯のほうが少ない……というか、ないような気がする。あ、宿で出たサラダくらいか？ 普段は僕が調味料を出しているけど、宿では塩だけの味付けだから嫌がっていたんだよね。まあ、それもマヨネーズを出したら食べてくれるようになったけどな。

好き嫌いがいいのはいいことだが、ここまで嫌いな食べものがない子供も珍しいよね。

「アレんとエレナは嫌いな食べものはないのか？」

「うにゅ？ ……おさけ？」

「お酒!? それは好きだと言っても飲ませないから安心して。それ以外ではある？」

「あれ！ にがいおちゃ！」

「あとね、あまくないカヒィ！」

「ああ……まあ、それらはそうだね」

お酒はもちろん、緑茶やブラックコーヒーは、子供はあまり飲まないものなのだから、当たり前である。というか、全部飲みものだよ！

「じゃあ、苦いものが苦手なことかな？」

「にがいののは、や〜」

そういえば、苦い野菜というものに会ったことがないか？

子供の嫌いな野菜代表のピーマンもそうだが、ゴーヤもまだ見てないな。ゴーヤとか食べさせてみたらどういう反応をするんだろう？ まあ、食べさせる前に探すところから始めないといけないんだけど……ちよつと本格的に探したくなってきた。見つかるとしたら他の国か迷宮かな？

《あら、兄様が何かを企んでるわ》

「「そうなの？」」

「そ、そんなことないよ」

悪戯^{いたづら}めいたことを考えていたら、フィートに見咎^{みとが}められてしまった。

「今度はこの迷宮に行こうか考えていただけだよ」

「めいきゅう、いくー」

《ボクも行きたい！》

《オレもオレも！ 早く行こう！》

なので、慌てて言い訳っぽいことを言うと、子供達は大いに喜んだ。

「王都での用事が終わってからな」

とりあえず、オークションに参加するまでは王都にいる予定なので、それまでに次に行く迷宮を吟味^{ぎんみ}しておくことにしよう。

◇ ◇ ◇

翌日、街に戻った僕達は、真^まっ直^すぐにルーウエン邸へと帰宅した。

本来なら、冒険者ギルドに寄ってパステルラビットの依頼を探し、引き取ってもらうところなのだが、子供達が一度ロザリーさんに見せたいと言いつ出した。その気持ちもわかるので、十五匹のパステルラビットは一旦^{いったん}連れて帰ることにした。

それにさ、ヴァルトさんに頼まれたのは青のパステルラビット。子供達の独断と偏見^{へんけん}で赤、銀

色……まあ、銀のパステルラビットはいなくて、真^まっ白^{しろ}のオーロラバードに落ち着いたけどね。

その三匹は是非ともロザリーさんに引き取ってもらいたいが、もしかしたらロザリーさんにも好きな色とか、飼ってみたい色の希望とかがあるかもしれないから。見せるついでに希望を聞いてみようと思う。

折よく、今日はヴァルトさんも家にいたので、ロザリーさんと揃^{ひろ}ってお披露^{ひろめ}目^めができた。

「まあー」

「……うわー」

ロザリーさんはうつとりとした表情でいかにも喜んでいそうな様子だったが、ヴァルトさんは呆^{あき}れたような表情だ。

「ロザリーねえさまにはー」

「あおいことー」

「あかいこー」

「どちらも可愛いですわ」

ロザリーさんは子供達から青と赤のパステルラビットを受け取ると、しっかりと抱きしめていた。
「……さすがにこの数はおかしいだろう！」

「アレンとエレナにかかると、ほいほい見つけてくるんですよ」

「ほいほい見つけたとしても、普通は逃げられるだろうが！」

「それが逃げないで寄ってくるんですね。不思議なことに」
「はあ!？」

僕がパステルラビットを見つけた時の状況を説明すると、ヴァルトさんが予想通りの反応を示してくれる。

「うちのジュールやフィートがいきなり顔を近づけても、大した反応を見せないで寛ぎますからね」

「……」

ヴァルトさんは頭が痛い……とばかりに眉間を揉みこんでいた。

「ヴァルトにい〜」

「……おう、どうした？」

「このこも」

「かってね〜」

アレンとエレナが手のひらに乗せたオーロラバードを差し出す。

「毛玉……じゃなくて、鳥か？ 雛？」

「オーロラバードだって〜」

「……おい、タクミ？」

ヴァルトさんはオーロラバードの姿は知らなかったようだが、名前は知っていたようだ。

子供達から種類を聞いた途端、僕のほうを真っ直ぐに見つめてくる。

……説明をしろ、という無言の圧力を感じるな〜。

「子供達が見つけました。以上です」

「おい！」

「いや、それ以上の説明がないんですって〜」

事実、子供達が「あっ!〜」と声を上げて茂みに入り、帰ってきたらもう連れてきていたんだからね。一応、そのことを話すと、ヴァルトさんは頭を抱えてしまった。

「……おまえら、本当に何やっているんだよ」

「いやだな、特に変な行動はしていませんよ」

「そうだな。行動自体は変じゃない。多少腑に落ちないところもあるが……まあ、一般的な行動だと言える。ということは！ おまえ達の存在自体が変だということだな！」

「酷っ！ 存在を否定!？」

「否定はしていない！ 変だと言っている！ 何でいつもいつも、とんでもないことをしでかすんだよ！ 何だよ、このパステルラビットの数は！ それに、オーロラバードだって？ そんなのを見つけたら、問題にならないわけがないだろうがっ!!」

ヴァルトさんは、かなり怒っているようだ。

「パステルラビットが大量なのは……えっと、もう四回目です。それは諦めてください。で、オー

ロラバードのほうですが、僕だって珍しいのは知っていますよ。だけど、見つめちゃったんですもん。そして、逃げないんですもん！ 連れて帰るしかないじゃないですか！」

「元いた場所に置いてくるっていうのがあるだろう！」

「おいてくるの」

「かわいそうだよ」

ヴァルトさんと言いかいの形になると、アレンとエレナから援護が入る。

「そうですよ！ 置いてくるなんて可哀想ですわ」

「……え？」

それどころかロザリーさんからも援護が入って、それにはヴァルトさんも驚きの表情を見せる。

まあ、自分の新妻が自分の味方をしてくれなかったわけだし、それは予想外だよな。

「アレンさんとエレナさんから聞きましたが、この子は保護を求めて来たのですよ。それを置いてくるなんて絶対に駄目ですわ！」

ロザリーさんは二匹のバステルラビットと一緒にオーロラバードをしっかりと胸に抱えながら、ヴァルトさんに物申していた。

「で、でもな、ロザリー。オーロラバードの存在を人に知られたら、大騒ぎになるのは間違いないんだぞ？」

「人に知られないようにしましょう！」

「いやな、そうは言っても……無理があるだろう？」

「お世話はしっかりわたくしがしますし、お散歩はお庭で我慢してもらいますから……お願いしますー！」

「うっ……」

ロザリーさんが横に座っているヴァルトさんを見上げ、懇願するように見つめる。すると、ヴァルトさんは言葉を詰まらせた。

まあ、新妻から上目遣いをお願いされたら……こういう反応になるよな。

『びい』

オーロラバードも「お願い」と言わんばかりの訴えるような瞳でヴァルトさんを見つめる。というか、オーロラバードって自分から売り込むくらい、飼われないと思っっているんだな。

「……ヴァルト様」

『……びい』

「くっ……わかった。客とかには見つからないようにするんだぞ」

「ありがとうございます」

『びいー！』

ロザリーさんとオーロラバードの上目遣い攻撃に、ヴァルトさんもついに折れた。

「よかったね」

『びい』

子供達とオーロラバードが喜び合っている。会話が成り立っているような不思議な光景だ。

「ロザリーねえさま、かわいがってね」

「はい、もちろんです」

『びい』

「はい、こちらこそよろしく願います」

あれ？ ロザリーさんとオーロラバードも地味に通じ合っている？ まさかな、偶然だね？

「ロザリーねえさま」

「はい、何でしょうか？」

「パステルラビットは？」

「にひきでいい？」

「え？ えつと……どういふことでしょうか？」

「もつといらない？」

「……」

アレンとエレナはロザリーさんに他に欲しいパステルラビットがないか確認する。

すると、ロザリーさんは少し悩んだ素振りを見せた後、何かを決意したように僕達のほうを見えた。

「あ、あの、お願いが……あるのですが……」

「なーに？」

「その……ゆ、友人に、譲^{ゆず}ることをお許しただけでよろうか？」

ロザリーさんは友人にもパステルラビットを贈りたいようだ。

「ゆゆうじん？」

アレンとエレナは不思議そうな顔をしながら首を傾げていた。

“友人”という言葉聞き慣れていないのもあるが、ロザリーさんが少し言葉を詰まらせたせいでもあるかな？

「アレン、エレナ、友人。友達のことだよ」

「おお！ ともち！ いいよ！」

アレンとエレナは二つ返事で了承する。

「いいのですか？」

「うん、いいよ。なにいろがいい？」

「タクミさん、本当によろしいんでしょうか？」

アレンとエレナが軽い感じで了承するので、ロザリーさんは僕にも確認してくる。

「もちろんですよ。あ、でも、ここにいるパステルラビットで足りますか？」

「え、あの、譲りたい友人は二人なので、二匹いれば……」

「遠慮^{えんりょ}しなくても、ここにいる子は全部大丈夫ですよ？」

「い、いえ、その、わたくしと仲良くしてくれる人は少ないので……」

「……」

あ、しまった。わざとではないが、地雷を踏んだような気がする。

ロザリーさんは学生時代にいろいろあつたって言うていたからな、きつと仲良くしている人物は少ないのかもしれない。

「上辺だけの友人がうじゃうじゃいても煩^{わづい}わしいだけだし、無二の友は二人もいれば充分だろう。で、ヴァッサー夫人とクラーク夫人は何色が好きなんだ？」

どう返答しようか考えていると、ヴァルトさんが助け舟を出してくれた。

というか、今、ヴァッサー夫人と言ったか？ ヴァッサーと言えば、先日の披露宴で知り合った

騎士団の副団長、レジナルドさんのことだ。

「レジナルドさんの奥さんですか？」

「いや、副団長の長男——レオナルド先輩の奥方だな。レオナルド先輩は、俺の学園の先輩でもあるが、騎士の先輩でもある。あ、そういえば、先輩には息子がいたな」

「じゃあ、やっぱりパステルラビットは一匹じゃなくて複数のほうがいいんじゃないですか？」

「どうだろう？ まだ小さいはずだしな。その辺は本人に確認したほうがいいだろうな。タクミ、その確認が終わるまで、そいつらはうちに置いておいてもいいか？」

「もちろん、いいですよ。アレンとエレナもいいよな？」

「うん、いいよ」

残りの十三匹のパステルラビットは、譲る人達の希望を聞くことになったので、とりあえずルーウェン家にいてもらうことになった。

「悪いな。残ったパステルラビットは冒険者ギルドに持ち込むつもりでいたんだろう？ それがない分の補填^{ほてん}は俺がするから」

「いえいえ、一応、お祝い名目ですので、補填は結構です。そもそも、パステルラビットは可愛がつてくれる人を探すのが目的で、金銭は二の次ですので気にしないでください」

もともとパステルラビットを売るという形には忌避^{きひかん}感があったので、知り合いに譲るのが一番僕の心にも優しいのだ。

「おにいちゃん、おにいちゃん」

「どうした？」

「テオドルくんと」

「ラティスくんにも」

「「あげるー？」」

「ああ、そうだな。リスナー家にも聞いたほうがいいかもな」

僕の後見をしてきているもう一つの家、リスナー伯爵家^{はうす}。その家の当主、セドリック・リス

ナーさんの息子達、テオドルくんとラティスくんにも以前、パステルラビットを一匹譲っている。だが、あそこは娘さんもいて、三人兄弟だ。三人で仲良く可愛がっている方がいいが、取り合いにでもなっていたら大変なので、聞くだけ聞いておいたほうがいいだろう。

あと、せっかく面識を得たので、王弟のリシャル様にも奥方にどうかと手紙を出そう。たぶん、失礼にならないと思うしな。

というわけで、僕達はすぐに手紙を書くことにしたのだった。

第二章 お茶会をしよう。

ロザリーさんは友人二人に、僕はリスナー家と、リシャル様が婿入りしたフォード家、それと……王様のトリスタン様に手紙を出した。

王妃のグレイス様と王太子妃の 아우로라 様にはパステルラビットを一匹ずつ譲っているが、王孫のユリウス様には譲っていないのを思い出したからだ。まあ、グレイス様と 아우로라 様が飼っているパステルラビットと一緒に可愛がっている可能性もあるが、念のために聞くだけ聞いてみることにしたというわけである。

それと、ヴァルトさんがオーロラバードを保護したことをトリスタン様にも報告したほうが良いと言うからな。パステルラビットがメインで、オーロラバードがついでの内容だ。

「もう返事が来たんですか？」

驚くことに、手紙を出した翌日、全部の返事がルーウェン家に届けられていたのだ。

「ふふっ、そうね。あ、タクミさん宛ての手紙は、一応、我が家宛てでもあったから、先に内容を確認させてもらったわよ。——はい、これね。タクミさんも確認してちょうだい」

「お手数をおかけしてすみません」

僕はルーウェン伯爵夫人で、アレンとエレナが“おばあ様”と呼んで懐いているレベッカさんから手渡された手紙を早速確認してみる。

「うわ……」

「どうしたのー？」

一通目、トリスタン様からの手紙は、もの凄く簡潔なものであった。『明後日、来い』だって。まあ、オーロラバードのことを説明しに来いってことだろうね。ということは、オーロラバードもこっそり連れて行かないといけないのかな？ 人目につかないようにしないと。まあ、ポケットにでもすっぽり入りそうだし、どうとでもなるか。でも、安全性を考えるなら蓋のある籠に入ってもらったほうがいいかな？

あとは、パステルラビットは何色でもいいが一匹欲しいというのも締めくくりに書かれていた。

「明後日、お城においでって。ユリウス様にパステルラビットを連れて行くから、一匹選んでおいで」

「わかったー」

色は何色でもいいようなので、アレンとエレナに一匹確保しておくように言った。

「……ん？ んん!？」

「こんどは」

「なーに？」

二通目、三通目はリスナー家とフォード家からだ。二家は是非ともパステルラビットを譲り受けたいという内容で、早速譲り受けるために本日お伺いしても良いか……という内容だった。

「えっと……今日ですか？」

「ふふっ、ロザリーさんのほうに来た手紙も、似たり寄ったりの内容だったみたいよ」

「本当ですか？」

どうやら、ヴァッサー家とクラーク家からもすぐに伺いたいという内容の手紙が来ているようだ。

「なにになに？ おしえてよー」

「えっとな、みんな、パステルラビットを貰いたいって」

「おおー」

僕とレベッカさんのやり取りだけでは意味がわからなかったのだろう。アレンとエレナは僕の服を引き、内容を教えると訴えてくる。

簡潔に教えれば、嬉しそうに微笑んだ。

「ということ……四つの家が今日、来たいって言っているってことですか？」

「そうみたいね。一応、四家には了承の返事を出しておいたわ。ご家族でどうぞってね。ああ、それと、同席者もいるという内容だね。まあ、小規模なお茶会だと思えばいいわ」

……なるほど、ルーウェン家主催のお茶会に四つの家から参加者ってことだね。

って！ 唐突なお茶会主催だなんて、準備が大変じゃないのかな？

「すみません！ ご迷惑をおかけして！」

「急な来客はよくあることだから大丈夫よ。午後からですから、時間に余裕がありますしね。それに良い機会ですから、采配はロザリーさんに任せてみたの」

「え、じゃあ、ロザリーさんが忙しくしているんですね」

「アルメリアさんに補佐をお願いしたから大丈夫でしょう」

……夫人教育の一環かな？ ロザリー様と長男グランヴェリオさんの奥さんであるアルメリアさんが対応に追われているようだ。

……レベッカさんは意外とスパルタだったりするのだろうか？

「あら、何かしら？」

「い、いいえ！ 何でもありません」

僕が不穏なことを考えたからか、レベッカさんがそれはもう……良い笑顔でにっこりと微笑む。

「あ、そうだ！ まだ早いかもしれませんが、ルカリオくんにもパステルラビットはいかがですか？ レベッカさんが飼っている子の番としてでもいいですけど！」

笑顔が若干怖かったので、僕は無理やりレベッカさんの孫であるルカリオくんの話題を振った。

「ふふっ、あら、いいの？」

すると、レベッカさんは笑ってその話題に乗っかってくれた。

「いこよー」

「ありがとう。じゃあ、今日来るお客様が選んだ後に、うちの子のお婿さんを選ばせてもらおうかしら」

レベッカさんが飼っているパステルラビットは雌だったか？ 譲った時、鑑定で見た情報を教え

たが、誰のが雌で誰のが雄だったかは覚えていないな。

「先に選んだほうが、好きな色の子にできますよ」

「ありがとう。でも、大丈夫よ。どの色の子もとても可愛いもの」

「そうですか。それならいいんですが……あ、雄が残るとは限らないんじゃないですか？」

「あら、それならお友達を選ぶだけよ」

「ですよね」

無理に番にする必要はないので、雌雄はどちらでもいいようだ。

「じゃあ、そうなると……残りは三匹かな？」

十五匹連れ帰って、レベッカさんに一匹、ロザリーさんのところに二匹、ユリウス様に一匹、今日来る四家にそれぞれ二匹として……残りは三匹かな？

「さんびき、のこっちゃうー？」

「予定ではな。まあ、今日来る人達で、二匹以上欲しいって言ったら、貰ってもらえばいいさ」

「そっだね」

そういうば、ヴァッサー家のレジナルドさんには娘がいるって言っていたから、その令嬢がもし

欲しいなら譲ってもいいのかもな。

「じゃあ、今回は全員引き取ってもらえるかもしれないし、とりあえずはギルドに出ている依頼は受けなくても大丈夫だな」

「おお、よかったね」

「そうだな。じゃあ、今のうちにお城に連れて行く一匹を選んで除^おけておいて、お茶会の準備の手伝いがないか聞いてみよう」

もしかしたら手伝えることはないかもしれないが、ロザリーさんとアルメリアさんに確認してみよう。

「あら、手伝ってくれるの？」

「僕達が原因のようなものですからね」

「ふふっ、タクミさんならそう言ってくれると思ってたわ」

「もしかして、僕にできる仕事がありますか？」

「ええ。タクミさんにはお茶請^{ちやう}けをお願いしたいのだけど、今からでも間に合うかしら？」なるほど、お茶菓子ね。それなら、手伝うことができるな。

「何品も作れと言われれば辛いですけど、一、二品なら問題ないですね」

「本当？ それならお願いしてもいいかしら？」

「もちろんです。じゃあ、すぐに取り掛かりますね」

レベッカさんに断りを入れて、僕達はすぐに厨房^{ちやうぼう}へと向かうことにした。

「おにいちちゃん、なにつくるー？」

「ちよつと待ってな。今、考えるから」

さて、何を作ろうかな。できれば新作がいいけれど……すぐに作業に取り掛からないといけないから、思いつかなかつたら……パウンドケーキとかが無難かな。

「アレンとエレナも、厨房に着くまでに食べたいもの考えてみて」

「はーい」

僕達は何を作るか悩みながら厨房に向かった。

「さて、どうするかな。——二人とも何か思いついたかい？」

厨房に着いた僕は、まずアレンとエレナに意見を求めた。

「はいはいー」

「はい、アレンくん、エレナさん、どうぞ」

「はい！ アレンは、ヨーグルのおやつがいいです！」

「はい！ エレナもヨーグルのがたべたいです！」

「ヨーグルね」

そういえば、ヨーグル——ヨーグルトを使った甘味はまだ作っていなかったな。